

特集にあたって

日本大学医学部整形外科科学系整形外科科学分野 徳 橋 泰 明

今月号の特集は、「仙腸関節の基礎と臨床」です。仙腸関節は、仙骨の両側外側部と腸骨が接して形成されている関節です。近年、この仙腸関節が2つの理由で注目されるようになりました。

1つには仙腸関節の機能障害による痛みについてです。仙腸関節に関連する痛みについては、現在なお議論が絶えません。最近、非特異的腰痛が見直され、同じ非特異的腰痛でもその原因は異なり、非特異的腰痛の中にこの仙腸関節由来の痛みがあることが判明し、しかも決して少なくないとされています。仙腸関節に起因する痛みの大部分は機能障害であるため、画像による診断は困難です。そのため、確定診断には仙腸関節ブロックによる症状の軽快をもってすることが臨床に多いとされています。しかし、仙腸関節に起因する痛み、仙腸関節機能障害については、非特異的腰痛全般と同様に科学的視点からの研究が少ないのが現状です。本特集では、この方面で長年研究をなされてきた日本仙腸関節研究会の先生方に診断、診断のピットフォール、そして治療についてご執筆いただきました。また、AKA-博田法（これに関連する講演会を開催するといつも超満員でした）についても長年携わっていらっしゃいました片田重彦先生にお願いして、その概略についてご執筆いただきました。また、欧米ではこの仙腸関節痛の治療目的で長年固定術が行われてきましたが、日本での手術成績の報告は少ないのが現状です。そこで、村上栄一先生に平均10年弱の長期術後成績をご紹介いただきました。

注目されたもう1つの理由は、仙腸関節機能障害に対してではなく、日常診療で仙腸関節を固定することが以前に増して多くなったことです。そして、術後の自然経過を含む諸問題が話題に上るようになったことです。骨盤骨折、特に重度の仙骨に及ぶ骨折や脊柱変形に対する矯正固定手術のアンカーとして、仙腸関節が固定範囲に含まれるようになりました。その際、解剖学的構造を考慮した新たな固定方法が開発されています。一方、仙腸関節を固定したことによる弊害も同時に明らかになりました。多椎間固定術後の隣接椎間障害はある程度避けられないといわれていますが、実際にはどうなのかについて多くの臨床例をおもちの澤口毅先生、阿部栄二先生にご執筆をお願いしました。

今回は前述のごとく、仙腸関節に対して多角的視点に立って第一人者の先生方にご執筆いただきました。今まで特集されることのなかった仙腸関節について、本特集によりみつける新たな発見は少なくないと考えます。ぜひご熟読いただき、明日からの日常診療に生かしていただければ幸いです。